



GERHARD THÜR

OPERA OMNIA

<http://epub.oeaw.ac.at/gerhard-thuer>

Nr. 274 (Bericht / *Report*, 2008)

Nihon deno Kodai-ho kenkyu / **Das Studium der
antiken Rechte in Japan**

Kaiho (Vereinsbericht, japanisch) 96, 2008, 3–7

Schlagwörter: Pandektistik — Altertumswissenschaft — Papyri — Seminare —
Rechtsvergleichung

Key Words: pandectism — classics — papyri — seminars — comparative law

gerhard.thuer@oeaw.ac.at

<http://www.oeaw.ac.at/antike/index.php?id=292>

Dieses Dokument darf ausschließlich für wissenschaftliche Zwecke genutzt werden (Lizenz CC BY-NC-ND),
gewerbliche Nutzung wird urheberrechtlich verfolgt.

This document is for scientific use only (license CC BY-NC-ND), commercial use of copyrighted material will be prosecuted.

Gerhard Thür, Das Studium der antiken Rechte in Japan – *Nihon deno Kodai-ho kenkyu*, in: *Kaiho* (Vereinsbericht) 96, Tokio 2008, 3-7.

古代ギリシア法研究者ゲアハルト・チュール (Gerhard Thuer) 教授とエヴァ・ヤカブ (Eva Jakab) 教授の来日

葛西康徳 (大妻女子大学)

2008年3月7日から23日までの約2週間、日本学術振興会の招聘によりゲアハルト・チュール (Gerhard Thuer) グラーツ大学教授 (GTh 略記) と、九州大学の招聘によりエヴァ・ヤカブ (Eva Jakab) セゲッド大学教授 (EJ 略記) が来日した。滞在中、日本各地で研究会を開催し、研究者および大学院・学部学生と交流した。年度末の多忙な時期にもかかわらず各会場で世話をいただいた方々には、まず心よりお礼申し上げたい。以下、研究会日程、開催地、そしてテーマを列挙する。

3月10日 (九州大学)、12日 (上智大学)、17日 (同志社大学) : Der Kauf im griechischen und roemischen Recht (EJ), Kauf, Eigentum und dingliche Sicherung im griechischen Recht (GTh)

3月13日 (大妻女子大学) : Sokrates vor Gericht. Ist Platons Apologie eine Prozessrede? (GTh)

3月18日 (大阪大学)、21日 (大妻女子大学) :

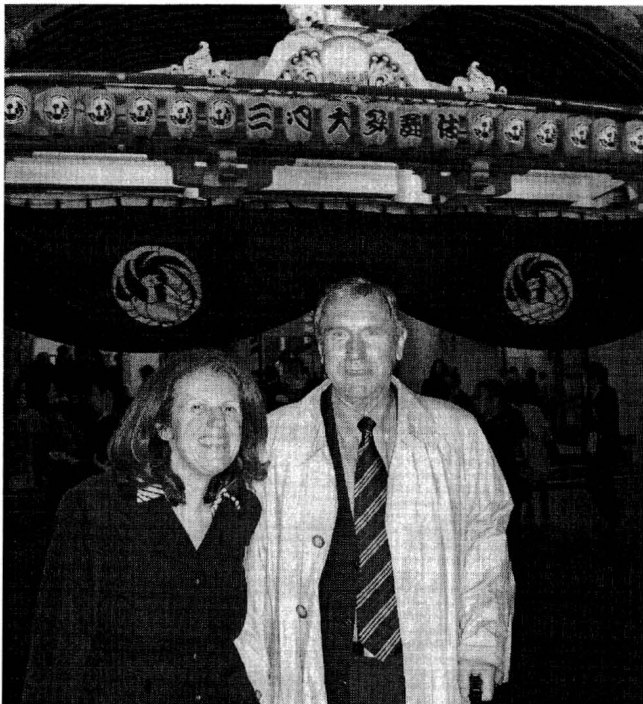
Wards and Guardians in Classical Athens and Rome, New Readings in the Fragment of Hypereides' Against Timandros (GTh)

3月18日 (大阪大学)、21日 (九州大学) : Risk management in Freight Contracts in the Roman Empire (EJ)

3月21日 (大妻女子大学) : The Principle of Fairness in Athenian Litigation : Thoughts on the Echinus and Enclema (GTh)

さて、古代ギリシア法、特にアテナイ法は、ギリシア史研究の中で近時注目されつつあるが、国内と海外ではかなり状況は同じではない。もちろん、西洋古代史研究者数の圧倒的に少ない (但し、非西洋圏では例外的に多い) 我国では、ギリシア法研究の対象が、国制 (裁判制度を含む)、市民 (従ってまた非市民) の法的地位、行政官職者の法的責任、そして一定の犯罪および刑罰に限定

されている。つまり、民事関係に対する研究が欠落しているのである。確かに、後述するように、ローマ法に比べてギリシア法の民事法における世界史的意義が小さいのは否めない。また、女子相続権に対する研究はわが国でも成されている。さらに、近時法廷弁論資料を利用した社会史・政治史研究も現われ始めた。しかし、まるでギリシア人には法が無かったとでも言われかねないほど、ギリシア人の日々の生活に関する法、即ち、所有、契約（商業取引）、相続に関する研究はわが国では少ない。それは何故か？筆者は、その原因の一端は、皮肉にも、アングロ＝サクソン系の研究者が現在ギリシア法研究をリードしていることにあると考えている。つまり、ギリシア民事法（特に実体法）の研究は、伝統的にヨーロッパ大陸の学者によって担われてきた。フィンレイは貴重な例外なのである。



両教授（銀座・歌舞伎座の前にて）

かかる現状において、チュール・ヤカブ両教授を招聘できたことの意義は大きいと考えている。チュール教授は、オーストリア出身、ウィーン大学法学部で学んだ後、DAADによりギリシア法の泰斗ヴォルフ（Hans Julius Wolff）教授の下で研鑽を積み、アテナイ民衆法廷における証拠手続法

の研究（*Beweisführung vor den Schwurgerichtshöfen Athens. Die Proklesis zur Basanos*, Wien 1977）を著すとともに、ヴォルフが創始した、ギリシア＝ヘレニズム法国際研究集会（Symposion）を主催している。この第20回研究集会が2007年9月に北イングランドのダラムで開催され、橋場弦氏と筆者はオブザーバーとして参加する機会が与えられた。教授は1997年以来、オーストリア科学アカデミー「古代法史委員会」委員長を兼務している。以下、チュール教授の上記のペーパーの概要を紹介しておくたい。

九州大学、上智大学・同志社大学で読まれたペーパーは、「古代ギリシア法における所有権と物的担保」に関するものである。ローマ法における所有権に関する研究は数多いが、ギリシア法における所有権の研究は非常に少ない。それゆえ、本研究会はわが国の研究者に始めて、このテーマの重要性を知らしめる非常に貴重なものとなった。ギリシア法において所有権が問題になる不動産売買のあり方を分析すると、そこではローマ法の原則と異なり（純粹な）諾成契約ではなく、抵当などの、物的担保をつけて行われる。本講演では、[katochos]とよばれる従来知られていなかった担保付の売買形式が、碑文の解読を通じて紹介され、非常に興味深い研究会となった。

大阪大学と大妻女子大学では、「古典期アテネとローマにおける被後見人と後見人」をテーマとし、ギリシア法の特徴である、未成年や未婚女性に対する後見制度に焦点をあて、かつ最近公刊された新しいパピルス断片（ヒュペレイデス『対ティマンドロス』弁論）の解釈を通じて、後見制度は被後見人の保護という側面だけでなく、被後見人の財産を巡る一種の「投資ゲーム」の側面があるという極めて注目すべき見解を提示した。同時にまた、この弁論作品はメナンドロスの新喜劇のストーリーと極めて類似している点も興味深い。

大妻女子大学では「法廷に立たされたソクラテス」と題するテーマに関して、DVD鑑賞を含め

て研究会を開催した。教授の研究活動の一環として、古代の法廷弁論の実演再現作業があり、法学部の学生への教育も兼ねている。今回、有名な「ソクラテス裁判」のグラーツ大学における実演（教授自身がソクラテスを熱演）DVDを持参され、皆で鑑賞した。その後、これをもとに、プラトンの作品『ソクラテスの弁明』におけるソクラテスのスピーチは、一般に考えられているようにフィクションではなく、実際のスピーチであるという、極めて注目すべき見解を示した。この見解をめぐっては、当然批判や疑問が会場から出されたが、教授の見解には従来考えても見なかった論点がいくつか含まれていることに一同驚かされた。

最後に、教授のご好意で、古代ギリシア（アテネ）の訴訟手続を「フェアネス (Fairness)」の観点から分析した最近の論稿を（英語で）紹介していただいた。教授によれば、民衆法廷としてのアテネの裁判手続の前に、種々の弁論準備手続があり、そこで提出した証拠以外の証拠は、民衆法廷では新たに提出できないという原則などによって、「フェアネス」の原理が維持された。

以上の研究会のテーマはいずれも、ギリシア法研究の現在の最前線に位置し、教授の見解は、恐らく教授自身の学識に裏打ちされた独自のものである。同時にまた、各テーマは、招聘者の希望にあわせて、「訴訟手続、弁論術、リーガル・ク

<日本印象記>

日本での古代法研究

ゲルハルト・チュール（グラーツ大学、オーストリア）

私は個人的な経験からヨーロッパと合衆国における古代法の研究・教育状況についてはよく知っている。1966年以來ウィーンとミュンヘンおよび合衆国のラトガーズ、ブラウン、オースティンの各大学でローマ法と古代ギリシア法の授業をしているからである。そこで本報告で念頭におけるのはローマとギリシア法だけで、古代オリエン

ティック」の領域をカバーしている。とりわけ、持参されたDVDは本邦初公開であり、研究会参加者は非常に興味をもって鑑賞した。

ヤカブ教授は、ハンガリー出身、セゲッド大学法学部で学んだ後、同じくDAADでミュンヘン大学、レーオポルド・ヴェンガー研究所でネル (Dieter Noerr) 教授の下で、ギリシア・ローマ法における契約、特に売買法の研究に従事し、この分野に研究をリードしている (*Praedicere und cavere beim Marktkauf. Sachmängel im griechischen und römischen Recht*, München 1997)。教授の方法論は、古代ローマ法をその時代の実際の現場（実務）でどのように機能していたかを、資料（碑文・パピルス）とローマ法大全などにおける法学者の議論（法ドクマーティク）をつき合わせて考察するというものである (W. Ernst / E. Jakab (eds.), *Usus Antiquus Juris Romani. Antikes Recht in lebenspraktischer Anwendung*, Berlin / Heidelberg / New York 2005)。ここにおいて、チュール教授のギリシア法研究と重なり合うのである。なぜなら、ローマ契約法の主要な実務資料はギリシア語で書かれたパピルス資料だからである。教授もまた、上記「Symposion」の強力なメンバーとして活躍している。

最後に、近い将来国際研究集会「Symposion」を日本で開催したいという筆者の希望を伝えて、お二人を見送ったことを付言しておきたい。

ト、エジプト法については考慮の外にあることを一言しておく。私はとくにミュンヘン大学の教授として日本から来た多くの研究者や学生とすでに知り合っていた。異質な文化の歴史的次元への接近法をマスターしようとする、彼らの勉学熱心さやその能力には常に感銘を受けてきた。日本の法学者が、ドイツ民法典 (BGB) に影響を受けた故

国の民法の研究を通じてドイツの法学に親近感を持っていることは、よく知られた事実である。そしてドイツ民法典は強度にローマ法を土台として形成されたから——19世紀に盛んであった「パンデクテン法学（*ローマ法を素材として民法を体系化した学問）」という形で——、日本の法学者のもとでは今日でもなおローマ法への関心が存する。これに反して古代ギリシア法への関心は、ヨーロッパや合衆国を訪れる日本からの客人の間には、私はこれまでほとんど見出すことがなかった。

こうした日本の外で形成された経験に基づいて、私は「日本学術振興会」によって寛大に与えられた2週間の研究助成期間内で（2008年5月7～23日）、日本の現場における古代法の研究・教育状況を自身で学び知ることの大いなる関心を抱いていたのである。私と同時に私の妻であるエヴァ・ヤカブ——セゲッド大学（ハンガリー）のローマ法教授——、が福岡の九州大学に招待された。私の研究の重心は古代ギリシア法にあるから、この二つの招待の組み合わせから、福岡はとくに古代法の内ローマの部分に関心を持っていることが見て取れる。



大妻女子大の講演にて

私の個人的印象が形成されたのは以下のところである。福岡の九州大学（世話人：西村重雄名誉教授、五十君麻里子教授）、東京の上智大学、大妻大学（世話人：福田誠治教授、小菅芳太郎名誉教授、小川浩三教授、葛西康德教授）、京都の同

志社大学（世話人：西村安博教授）、大阪大学（世話人：林智良教授、栗原麻子准教授）。私の世話人が法学畑と古代文献学や古代史畑との出身者からなっているのは偶然ではない。古代ギリシア法を日本においては（英国や合衆国と同様）法学部ではなく「古典学科」が扱っているからである。私が多くの講演で話したテーマは、「売買と物権上の担保」「ソクラテス裁判」「後見人制度」「裁判の公平性」であり、四つともギリシア法に関わっている。その他に博士課程の学生のためのローマ法のセミナーに参加した。

全般を通して日本の同僚たち——男性も女性も——の手厚いもてなしに深い印象を受けた。いつも彼らによって日々の小さな問題に助けが与えられた（その際、日本に英語を解する人はきわめて少ないことを経験せざるを得なかったが）。同僚からは日本の生活様式、文化、歴史、宗教、建築法について詳細な案内を得たし、もちろん大学におけるアカデミックな生活についてもいろいろ教えられた。日本料理と日本風呂は親切なご招待と好意あふれるお勧めとのおかげで理屈のみならず実践においても楽しむことが出来た。日本料理は確かに最近では世界中に知られるようになったが、本物の味と雰囲気とを、私が大元の国で体験出来たように、味わうことが出来るのは希である。

日本の学問生活についての私の経験は図書館の訪問とセミナー参加に限られる。とくにローマ法においては図書が整っており、それによって自分の研究を進めることができる。ドイツやオーストリアと同様に地域によって図書の設備に相当の違いのあることは当然のことであろう。もっとも、伝統的な研究の中心地であるミュンヘンやウィーンやローマに比べられるほどの設備を持った図書館を見出すことは出来なかったが。古代ギリシア法になると状況はいささか異なる。古代ギリシアの作家の一般的図書がどこでも提供されている。ギリシアの碑文の重要な集成も多くの都市で同様に手にすることが出来る。パピュルスの校訂

については関心が薄い、パピュルス学は特別の分野となっており、世界中を見渡してもわずかな場所でのみ扱われているのである。パピュルスはしかし、ギリシア法の重要な史料である。それがローマ法についてもそうであることは、ヤカブ教授がその講演で示したところである。ギリシアのパピュルスとローマ法とを結びつけるのは新しい動向であって、ヨーロッパそのものでもまだ少数の学者によって始められたばかりであり、合衆国や日本ではまだその地歩を固めるには到っていない。

私が最も驚いたのは、アカデミックな面でセミナーのスタイルについてであった。世界中のほとんどどこでも一回のセミナーの時間は講義時間の2倍に制限されており、そのためセミナーは90分から最大でも120分である。私がセミナーをやったどの日本の大学でも、講演と討論のために講義の4倍の時間が予定されていた。この実際上無制限の時間は、私が若い頃出席した恩師ハンス・ユリウス・ヴォルフのもとでのセミナーのやり方を思い出させた。ヴォルフは80歳直前までベルリンでドイツの大学者たちと共に研究していた。そのセミナーは当時の学問的教育の最高点であり、その学問的討論は最高水準にあった。こうした伝統が日本では依然生きているのである。

日本の学者の、自分の学問形成の一部を担った国の学問に対する志向が興味深かった。既に述べた歴史的な理由から、ローマ法の学習者は多くがドイツの学問に頼っている。そうした人々の前ではドイツ語で講演することが出来た。イタリアやフランスで学んだ日本の法学者も私について来てくれた。有用だったのは、ドイツ語ないし英語で行われた討論での発言もその答えも、いつでも日本語に訳されたことである。有り難いことにこうした翻訳をしてくれたのは、質問をしてくれたセミナーの参加者であった。これは大変に意義深い慣習である。

私のギリシア法についての講演では英語が優勢を占めていた。セミナーに参加した古典文献学と

古代史の日本人学者は、ほとんどが英国か合衆国で教育を受けていた。これは言葉の問題だけでなく、方法の問題でもある。アングロ・アメリカンの学問において法学の問題は大陸ヨーロッパのそれとは異なった風の扱いを受けている。アングロ・アメリカンの学問では、ギリシアの史料について実践的・社会的問題の方を法学的・教義主義的問題よりも多く問うのである。法学的教義は、日本においてもむしろローマ法の研究者の領域のようである。このことはギリシア法についての日本側聴衆についても当てはまる。ドイツの文献は(残念なことに英国と合衆国においてと同様)非常にまれにしか引用されないのである。

ギリシア法の一つの重要な側面は法の比較である。一つだけでなく多くのギリシア法的秩序が存するから、ここでは比較が不可欠の前提である。しかしながら、ギリシア以外の法、例えば古代オリエントの法、ローマあるいはゲルマン法との比較もまた必要なのである。討論の中で、日本の中世法も重要な貢献をなし得ることが示された。そこで私の提案したいのは、ギリシア法ないし自国の法制史を学んだ日本の学者は、法学を含めたドイツの古代学にもっと目を向けても良いのではなかろうかということである。こうした学問的鍛錬の中心地としては、第一にミュンヘンを、だがまたブライスガウのフライブルク、あるいは私が率いているウィーンのオーストリア学士院古代法史委員会を推薦したい。

学部段階の学生とは接触しなかったが、非常に有能な博士課程の学生とは出会った。私の勤めたいのは、そういう人たちもドイツ語による学問を無視しないで欲しいということである。このことはローマ法を学ぶ博士課程の学生にとってはすでに明らかなことであろう。しかし、ギリシア法においてもドイツならびにオーストリアとのコンタクトは価値あるものと私には思われる。

<原文ドイツ語、宮崎麻子さんの協力を得て、編集の方で訳を作成した。>

Das Studium der antiken Rechte in Japan

Prof. Gerhard Thür, Graz /Austria

Durch persönliche Erfahrung bin ich über die Situation von Forschung und Lehre der antiken Rechte in Europa und den Vereinigten Staaten gut informiert. Seit 1966 unterrichte ich römisches und altgriechisches Recht in Wien, München und an den Rutgers, Brown und Austin Universities in den USA; auf das römische und griechische Recht wird sich dieser Bericht beschränken, das altorientalische und ägyptische Recht bleiben außerhalb der Betrachtung. Besonders als Professor in München hatte ich bereits zahlreiche Forscher und Studenten aus Japan kennen gelernt. Ich war stets beeindruckt von ihrem Arbeitseifer und ihrer Fähigkeit, den Zugang zu der historischen Dimension einer ihnen fremden Kultur zu meistern. Es ist eine bekannte Tatsache, dass japanische Juristen durch das Studium ihres heimischen, vom deutschen Bürgerlichen Gesetzbuches (BGB) beeinflussten Zivilrecht eine Affinität zur deutschen Rechtswissenschaft haben. Da das BGB stark auf dem römischen Recht – in Gestalt der im 19. Jahrhundert blühenden „Pandektistik“ – aufbaut, besteht bei japanischen Juristen auch heute noch großes Interesse am römischen Recht. Interesse am altgriechischen Recht habe ich hingegen bei Gästen aus Japan, die Europa oder die Vereinigten Staaten besuchen, bisher noch kaum gefunden.

Nach dieser außerhalb Japans gemachten Erfahrung war ich sehr neugierig darauf, im Rahmen eines von der „Japan Society for the Promotion of Science“ großzügig gewährten zweiwöchigen Stipendiums (7.-23. März 2008) die Situation der antiken Rechte in Forschung und Lehre an Ort und Stelle in Japan selbst kennen zu lernen. Gleichzeitig mit mir wurde meine Frau, Dr. Eva Jakab, Professorin für Römisches Recht in Szeged (Ungarn), von der Kyushu Universität in Fukuoka eingeladen. Da mein Forschungsschwerpunkt im altgriechischen Recht liegt, sieht man bereits an der Kombination der beiden Einladungen, dass Fukuoka besonders am römischen Teil der antiken Rechte interessiert ist.

Meine persönlichen Eindrücke habe ich gewonnen: an der Kyushu Universität in Fukuoka (Gastgeber Herr Prof. Shiego Nishimura und Frau Prof. Mariko Igimi), an der Sophia und Otsama Universität in Tokio (Gastgeber die Professoren Seiji Fukuda, Yashitaro Kosuge, Kozo Ogawa und Yasunori Kasai), an der Doshisha Universität in Kioto (Gastgeber Yasuhiro Nishimura) und an der Osaka Universität (Gastgeber Herr Prof. T. Hayashi und Frau Prof. Asako Kurihara). Dass meine Gastgeber sowohl aus dem Kreis der Juristen als auch aus dem Kreis der klassischen Philologie oder Alten Geschichte stammen, ist kein Zufall. Das altgriechische Recht wird in Japan (so wie auch in England und den Vereinigten Staaten) an

den „Departments of Classics“ gepflegt, nicht an den Rechtsfakultäten. Die Themen, über die ich in zahlreichen Seminaren sprach, waren: „Kauf und dingliche Sicherung“, „Der Prozess des Sokrates“, „Vormundschaft“ und „Fairness im Prozess“ – alle vier aus dem griechischen Recht –, außerdem beteiligte ich mich an einem römischrechtlichen Seminar für Doktoranden.

Allgemein hat mich die Gastfreundschaft der japanischen Kollegen, Damen und Herren, tief beeindruckt. Stets fand ich bei Ihnen Hilfe in den kleinen Problemen des Alltags – wobei ich erfahren musste, dass die Bevölkerung in Japan sehr wenig Englisch versteht –, ausführlich bekam ich auch von den Kollegen Auskunft über japanische Lebensart, Kultur, Geschichte, Religion, Baukunst und selbstverständlich über das akademische Leben in den Universitäten. Japanische Speisen und Bäder konnte ich dank großzügiger Einladungen und liebenswürdiger Empfehlungen nicht nur theoretisch, sondern auch praktisch genießen. Japanische Küche ist zwar in den letzten Jahren in aller Welt bekannt geworden, doch wird selten die Qualität und das Flair des Originals erreicht, wie ich das im Ursprungsland erleben konnte.

Meine Erfahrungen im japanischen akademischen Leben beschränken sich auf den Besuch von Bibliotheken und die Teilnahme an Seminaren. Besonders im römischen Recht ist die Ausstattung an Literatur brauchbar, um eigene Forschung betreiben zu können. So wie auch in Deutschland und Österreich gibt es natürlich erheblich regionale Unterschiede. So gute Ausstattung wie an den großen traditionellen Zentren München, Wien oder Rom konnte ich allerdings in keiner japanischen Bibliothek finden. Im altgriechischen Recht ist die Situation etwas differenziert. Die allgemeine Ausstattung an antiken griechischen Autoren ist überall gegeben. Die wichtigsten Corpora der griechischen Inschriften sind ebenfalls an manchen Orten greifbar. Weniger Interesse besteht an den Papyruseditionen, doch ist die Papyrologie seine sehr spezifische Disziplin, die weltweit nur an wenigen Orten gepflegt wird. Papyri sind allerdings wichtige Quellen des griechischen Rechts. Dass sie auch für das römische Recht relevant sind, hat Frau Prof. Jakab in ihren Vorträgen gezeigt. Die Kombination von griechischen Papyri und römischem Recht ist eine neue Richtung, die selbst in Europa erst von wenigen Gelehrten eingeschlagen wird, in den Vereinigten Staaten und in Japan hat sie noch nicht Fuß gefasst.

Die größte Überraschung erlebte ich im akademischen Stil der Seminare. Fast überall auf der Welt ist die Zeit eines Seminars mit zwei Unterrichtsstunden begrenzt, ein Seminar dauert also 90 bis maximal 120 Minuten. An jeder japanischen Universität, an der ich ein Seminar hielt, waren mindestens vier volle Stunden für Vortrag und Diskussion vorgesehen. Diese praktisch unbegrenzte Zeit erinnerte mich an den Stil der Seminare, die ich bei meinem

Lehrer Hans Julius Wolff in meiner Jugend besuchte. Wolff hatte vor 80 Jahren noch bei den großen deutschen Gelehrten in Berlin studiert. Seminare waren damals der Höhepunkt der akademischen Lehre, akademische Diskussionen auf höchstem Niveau. Diese Tradition ist in Japan noch lebendig.

Interessant fand ich die Orientierung der japanischen Gelehrten an der Wissenschaft jenes Landes, in welchem sie einen Teil ihrer akademischen Ausbildung genossen haben. Aus den bereits erwähnten historischen Gründen lehnen sich die Vertreter des römischen Rechts stark an die Wissenschaft in Deutschland an. Vor diesem Publikum konnte ich auch Vorträge in deutscher Sprache halten. Auch die japanischen Juristen, die in Italien oder Frankreich studierten, konnten mir folgen. Hilfreich war es, dass die Diskussionsbeiträge und die Antworten, die in deutscher oder englischer Sprache geleistet wurden, stets auch in das Japanische übersetzt wurden. Dankenswerterweise übernahmen diese Übersetzungen stets die Seminarteilnehmer, welche die Fragen gestellt hatten – eine sehr sinnvolle Gewohnheit.

In meinen Beiträgen zum griechischen Recht herrschte die englische Sprache vor. Japanische Gelehrte der klassischen Philologie und antiken Geschichte, die an meinen Seminaren teilnahmen, genossen ihre Ausbildung meistens in England oder in den Vereinigten Staaten. Das ist nicht nur eine Frage der Sprache, sondern auch der Methode. Juristische Fragen werden in der anglo-amerikanischen Wissenschaft anders behandelt als im kontinentalen Europa. Die anglo-amerikanische Wissenschaft stellt mehr pragmatisch-soziologische Fragen an die griechischen Quellen als juristisch-dogmatische. Die juristische Dogmatik scheint auch in Japan eher die Domäne der Vertreter des römischen Rechts zu sein. Das zeigt sich auch in den japanischen Publikationen zum griechischen Recht: Deutsche Literatur wird (so wie leider auch in England und den Vereinigten Staaten) nur sehr selten zitiert.

Ein wichtiger Aspekt des griechischen Rechts ist die Rechtsvergleichung. Da es nicht nur eine, sondern viele griechische Rechtsordnungen gibt, ist hier die Vergleichung eine notwendige Voraussetzung. Der Vergleich ist jedoch auch mit nichtgriechischen Rechten, etwa den altorientalischen Rechten, dem römischen oder germanischen, notwendig. In der Diskussion hat sich gezeigt, dass auch das mittelalterliche japanische Recht einen wichtigen Beitrag leisten kann. Mein Vorschlag ist also, dass japanische Gelehrte, die das griechische Recht oder auch die eigenen Rechtsgeschichte studieren, sich mehr an der deutschen Altertumswissenschaft, einschließlich der juristischen, orientieren sollten. Als Zentren dieser Ausbildung schlage ich an erster Stelle München, aber auch Freiburg im Breisgau oder die

von mir geleitete Kommission für Antike Rechtsgeschichte an der Österreichischen Akademie der Wissenschaften in Wien vor.

Mit Studenten auf undergraduate Niveau kam ich nicht in Kontakt, jedoch mit sehr tüchtigen Doktoranden. Meine Empfehlung ist, auch diese mögen die deutschsprachige Wissenschaft nicht vernachlässigen. Das ist für Doktoranden im römischen Recht bereits selbst verständlich. Jedoch auch im griechischen Recht scheinen mir die Kontakte zu Deutschland und Österreich wertvoll.